大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

近代市民社会のニクセ：メーリケのメルヒェン『美しいラウの物語』をめぐって

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-08-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 岩元, 修 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00006127

近代市民社会のニクセ
― メーリケのメルヒェン『美しいラウの物語』をめぐって ―

岩　元　　修

序

『美しいラウの物語』(*Historie von der schönen Lau*)は大部なメルヒェン『シュトゥットガルトの皺くちゃ親爺』(*Das Stuttgarter Hutzelmännlein* 1853)の中のエピソードであり、外枠としての大きなメルヒェンの中に挿入された(小)メルヒェンとして知られている。中世の若い靴職人ゼッペを主人公にした『皺くちゃ親爺』の舞台となる時代が1320年ごろに設定されているとすれば、『美しいラウの物語』の展開する時間はさらに百年遡った1220年ごろであると推測される。(注1)『皺くちゃ親爺』が中世を舞台としながらも、そのテーマは結局は近代市民社会における男女関係や結婚問題であったことはすでに明らかになっているが、(注2)しかしこの『美しいラウの物語』のテーマもまた同様のことなのである。外枠のメルヒェンにおけるように、中世の若い男女（ゼッペと恋人フローネ）の姿を借りながらも、実際には近代の結婚問題を採り上げるという手法は、それ自体さほど奇異でもなければ珍しくもないであろう。それに引きかえメルヒェンや伝説の中にしか登場し得ず、しかもその結婚問題といえば人間の男との（実現困難な）恋愛が関っているのが常であるニクセ（水の精）を、(注3)わざわざ主人公に設定したこの『美しいラウの物語』も、実はやはり近代市民社会における結婚のあり方を主題にしているのである。そのことを作品を読み進めながら実証してみよう。

I

ラウは元来は黒海近くのドナウ川に棲んでいたニクセである。ニクセは魚の尾を持つか、足指の間に鰭をもつかするのが普通であるが、ラウの場合は鰭を持っている。(注4)しかし水の精ではありながら、彼女の母親は人間であったことも言われている。彼女はドナウ川のニクス（男の水の精）の侯爵である老齢の王の妻となったが、妊娠しても死産を繰り返し、侯爵の跡継ぎをもうけられない故に、ドナウ上流の「青の壺」という（実在する）地に追放され幽閉の身となっている。しかし流謫の身になるとき、姑は、ラウが「五度笑えば」生きた子どもを出産できるようになると予言した。腰元やペットの動物を伴って青の壺にやって来たラウは、この青の壺で笑うことを学ばなければならない。腰元は愉快な話を聞かせたり、楽しいゲームをしたり、ペットの猿におもしろい振りをさせたりして、何とかラウを笑わせようとするが、彼女の心は全く楽しまない。青の壺のなかでこのような暮らしをしている限り、ラウは笑うことができないままであり、満願の日は訪れず、子どもを持つことも、赦されて夫のもとに帰ることも実現しないであろう。この状態がどれほどの時間続いたのかは測り知れない。しかし相当の時間で

あったことは推測される。なぜならば、このニクセ・メルヒェンの事件が進行する時代を「現在」と呼べば、現在までにラウは次に述べられているようにキリスト教と葛藤を繰り返しているからである。「青の壺は不思議な泉の水をたたえる丸い大きな盆地で、修道院のすぐ後ろの険しい絶壁のそばにある[…]人々の間では壺に棲む意地の悪いラウと呼ばれもしたし、もちろん美しいラウとも呼ばれた。人間に対してラウは邪悪でもあれば、善良でもあったのだ。ときおり不機嫌な折には池を氾濫させ、町や修道院を危険に曝した。そんなときには市民はラウを宥めようと、厳かな行列を作って、金や銀の食器、盃、皿、小刀などの贈り物を運び供えた。このことについて僧侶たちは、異教的な習俗であり、邪神崇拝であるとして熱心に反対し、ついには実際にこの習慣がなくなってしまったのである。そのせいで水の精は修道院を憎んでいたのだが[…]。」（482f.）

黒海付近から流されてきたころは、ラウはいわば女神であり、捧げ物を献呈される存在であったのだ。しかし物語の現在である、1220年頃の中世キリスト教の時代には、民間信仰の対象である女神は威信を失い、キリスト教の修道院に権威を剥奪されてしまっている。青の壺に棲み始めた頃は、ラウはたぶん恵みの女神、生命を育む女神として崇拝されていたのであろう。シュトルムの『雨姫』（*Die Regentrude* 1864）は、自然から分裂してそれとの接触を失い、近代の効率主義にまみれてしまった人間への警告が籠められた作品であるが、(注5)『美しいラウの物語』においては、その人間と自然との乖離の前兆のようなもの、すなわち、父権制度を貫徹するキリスト教が次第に世界を支配し、土着の宗教やアニミズムを駆逐して、科学万能という近代の基礎を作り始めている様子が比喩的に描かれているといえよう。

ラウが青の壺に棲み始めてからどれほどの時間が経過したのかは測定できなくとも、少なくとも作品の十三世紀には、恵みの女神としての彼女の威信も失せ、今はただ禍を引き起こす禍々しい自然、むしろ制御され管理されるべき野生の存在に堕していたのである。しかし、そもそも一種の石女として青の壺に追放されてきた時点で、彼女の権威失墜は始まっていたと言えよう。なぜならば生命を育む女神であるはずの彼女自身がもはや生きた子供を産むことが出来ず、いわばグレートマザー的な存在感を失っていたからである。

ところでラウが壺の底でどのような暮らしをしているかは、一つの伝説として語られている。あるとき生意気な牧童がラウを「雨蛙」と呼んでからかったため、ラウの怒りを買い、若者は水底に引き込まれて、そのまま腐り果てるところであったが、幸いにも知恵を働かせて地上に戻ってきた。そしてそのときに若者が水中御殿で観察してきたものを人々に伝えたことにより（一種の文化英雄的行為である）、ラウの生活ぶりは人口に膾炙したというのである。そこは冬でも暖かく、美しいホールがあって灯りがともり、床も壁も美しい絨毯で覆われて、豪華な家具が並んでいたといわれる。

ラウ自身もある領主の娘ではあったが、実は母親は人間であった。この点で、すでにラウは、ロマン主義の作家たちやそれ以前の物語作家たちが描いた水の精とは大いに異なるのである。水の精は魂を持たず人間の男と結ばれることにより魂を得ることになっていたが、その結びつきは必ず悲劇的であり、妻が水の精であることを知った夫が彼女を罵り、何もかも破綻させてしまう場合や、(注6) 妻が水の精であることを知りながら結婚生活を送るが、次第に妻への不信

感を育てる一方で人間の女に惹かれて、やがては妻を裏切り、そのため夫自ら命を落としてしまう場合がほとんどである。(注7) 人間と水の精の間には常に障壁が存在し、それを乗り越えようとして悲劇を繰り返すというのが、従来のパターンであった。(注8) しかし『美しいラウの物語』にあっては、そのような悲劇性など全く問題になっていない。むしろ初めから人間の血を引いているということから、人間の魂を獲得するか否かというようなことはいっさい話題に上らず、むしろ人間の血を引いているからこそ、人間と接触して人間の生活を体験しなければならず、その経験から逆に水の精としてのアイデンティティーを見出すということが問題になっているのだ。そのアイデンティティーが確立されたときに、始めて生きた子供を産むことが出来るというのが、この作品のいわばプロットなのである。それゆえラウのメルヒェンに、ロマン主義的な水の精の悲劇を予想してはいけない。むしろラウというニクセは、まったく人間と同じように、アイデンティティー獲得の修行が必要な存在であることを銘記すべきである。それゆえこのニクセの抱える精神的問題は、同時に人間の女性の問題であると言っても過言ではないのだ。年取った侯爵の妻となり（一種の政略結婚。近代では、自分の娘のような年齢の女性と結婚する中年や初老の男性は珍しくなかった）、男を愛することも知らず、女性として充分に成熟しないままに妊娠して、結局は子供を産み育てることのできない女性の問題。このような女性が成長し、セクシュアリティーとアイデンティティーを確立するにはどのような経験が必要なのか。これこそ、この（近代社会の女性の苦悩を代弁するような）ニクセの抱える課題であり、作品のテーマであると言えるであろう。

II

ラウは「特別な理由もないのにいつも悲しんでいた。」（484）ラウは心から笑うことを五回経験しない限り、生きた子供を産むことができない、五回目に笑ったときに何かが起きるであろうが、しかしそれが何なのかニクスにもわからないと、姑は言っている。夫は自分の努力に報わない妻を追放した。跡継ぎを残せない女は宮廷には置けないというのである。青の壺で彼女は、腰元に囲まれ一日に何度も豪華な衣装の着せ替えをしてもらい、お話を聞かせてもらったり、音楽や踊りを提供してもらったりして、日長一日まさに近代の有閑マダムよろしく退屈な時間を送っている。ペットの動物や小人が笑わせようとしても彼女の退屈は癒されず、全く笑いは生じなかった。追放されて以来、年毎の冬の始めには、故郷から使者が訪れて、この一年間に成果（笑いの徴候）はなかったかと問うが、その度に「私たちは昔からの歌を歌いました／そして昔からのダンスを踊りました／もう少しで上手く行くところでした／紳士方よ、一年のちにおいでください」（485）と応答され、吉報を持たずに王宮へ戻るばかりである。何百回これが繰り返されたことであろう。そしてその度にラウの悲しみは深まるばかりである。

このラウの生活に変化が起きるのは、この十三世紀である。もとは尼僧院であった建物がいまは世俗の手にわたり（父権制の時代の証かも知れない）、「尼僧亭」という名の旅館に引き継がれている。そこの女将ベータが、春に菜園の畑を耕したついでに、青の壺のわきの瓦礫の山を片付けて、そこにカボチャの種をまいた。そのお陰で夏には池の端は緑で美しく飾られ、

秋にはカボチャが見事に実ることになった。カボチャは多産、豊穣のシンボルである。豊穣の女神であったラウがカボチャを供えてもらい、逆に自分の安産と多産を祈願してもらっているようなものである。女将がカボチャを植えているときには、（男性）修道院の建物から、院長が女将を脅す振りをして、ラウを崇めるなかれと咎めている。ここにもキリスト教とラウの対立が現れているとも言えようが、それは同時に父権制社会からの一種の圧力とも読みとれよう。

ラウは、地下水道を通り抜け尼僧亭の地下室まで泳いできて、この女将の奉仕に礼を述べる。ラウは感謝のしるしに、特別な独楽をプレゼントするが、そのお陰で旅館はおおいに繁盛する。ベータには、尼僧亭の経営の中心である長男夫婦と、修道院のコックをしている独身の次男と、未婚の二人の娘がいた。彼女は寡婦であるらしい。ラウは女将と二人の娘および長男の妻と、「女だけの」つき合いを始めるが、特に長女ユッタとは「姉妹のように」親しくなる。ラウは月に一度は訪ねてきていたが、数年たったある夏の日、女将に勧められて水からあがり、人間の住居を見せてもらう。半分は人間の血が混じっているラウにとっては、これは自己のアイデンティティーを確かめるチャンスでもあるといえよう。「ずっと前から人間の住居を見たかったのです。そこでどんなふうになりわいが営まれ、どんなふうに糸が紡がれて反物ができあがるのか。あなたがたの娘さんたちがどのように結婚して、小さい子供たちをどのように揺りかごで寝かせるのか、見たかったのです」(488)というラウの言葉はそのことの現れといえる。同時に結婚生活の、性や出産についても知りたいという願望も表現されているであろう。

ユッタはラウに自分の着物を着せようと、水から挙がったばかりのラウの体をリンネルで拭いてやる。足の裏を拭くとラウはこそばさにくすくす笑う。これを笑いという成果に数えることを女将は訝しく思うが、しかしニクセであるラウが布で足を拭くことなど本来あり得ず、この経験はラウの人間としての部分を思い出させたようなものであり、アイデンティティー確認の一つの作業としての意味はある。そして成熟のために必要な笑いの一つに数えられてもよいであろう。またラウは室内の鏡に驚く。鏡を覗くのは始めての体験であるのだ。これもまたラウが人間的な仕方で自己を知る一つの経験なのである。

その後ラウは長男夫婦のベッドと子供たちのベッドを見る。何気なく表現されてはいるが、これも若い夫婦のセクシュアリティーや出産と子育ての問題への関心の現れであり、性的に成熟してゆくためには有意義な観察であると言えよう。このあと直ちに、二度目の笑いが訪れる。寝起きの子供がリンゴをくわえて、おまるにすわり排泄をしている。当然臭いもする。このユーモラスな絵にラウは女たちと一緒に朗らかに笑うのである。

二度も笑ったラウは幸福な気分でその夜眠る。ラウは夢の中でも笑う。その夢では女将が太ったニクセになって青の壺のなかに腰掛けていた。修道院長が女将に懸想していることを知っていたらしいラウは、彼が女将のニクセにキスをする夢を見る。すると夢の中ではその音が修道院全体に反響し、あわてた院長の僧帽は水に落ち、音を聞きつけたキリストが現れたため、院長は帽子の濡れた理由について嘘をつかざるをえない。目覚めたときラウは自分が夢を見ながら笑っていたことに気づく。夢の中でキスをしているのは女将ではあるが、このような夢を見るようになっている点に、ラウのセクシュアリティーの開花が読みとれよう。自分自身のキスを楽しむまでには到達していないが、母親代わりのような（ラウの母は人間であったのだ）

女将に、夢のなかで代行的に性的な営みをつとめてもらうことにより、ラウは、性に対する嫌悪感や恐怖感のようなものをかなり減少させることに成功しているのだ。しかも宿敵の院長を笑いの対象に出来た。夢の中でラウはフラストレーションを解消したのである。

人間の生活を特に「性的な」要素の強い局面から観察し、さらにはその影響によるのかまさに同じ夜にはやはり性的な夢を見て、ラウは、昼夜の体験によってたった一日で三度も笑う事が出来た。急激な進歩と成熟を遂げているのである。彼女が成長するためには是非とも人間との接触が必要であったのだ。多分離れていた人間の母の役割をベータが果たし、その娘たちが姉妹のようにして若い女性としての喜びや期待を教えてくれたのであろう。ラウはこうして成熟した女性としてのアイデンティティーを確立してゆくのである。

しかしベータは、ラウから夢の話を聞かされても、あまり良い反応を示せない。自分と院長が滑稽な役回りを演じさせられているイメージに、好感を抱くことなどあり得ないであろう。母親のように慕っていた女将から喜ばしい言葉をもらえず、期待のはずれたラウは、そのまま青の壺へ戻る。するとまたもや昔のわがままな怒りが生じて来て、池は氾濫しそうになる。豊穣の女神への回帰の道のりはまだ遠いのである。しかし女将の次男で修道院のコックをしているクサーヴァーが、ユーモアで氾濫を抑える。すなわち彼は、池が氾濫すればご主人様（ラウのこと）がベッド（池のこと）からすべり落ちるかも知れず、とても心配です、と言って、ベッドの脇にさす「ベッドはさみ」をわざわざ持ってきて、いつも氾濫を起こす場所に立て、大仰な召使いの演技をして見せる。結局ラウはまたもや大笑いをし、無事に怒りと氾濫は収まって、なんと彼女は四度目の笑いを経験することになるのである。これは「独身の若い男」が与えてくれた楽しみの結果であった。残るはあと一つの笑いである。

Ⅲ

しかしその後は笑いはなかなか訪れず、ドナウの宮廷からの使者には、期待はずれの答しか与えられない。成熟は一挙には進まないのである。ラウの不安は大きくなるが、彼女はもう一つ、人間の若い娘と同じように、まさに性のイニシエーションを体験しなければならないのである。それは糸紡ぎ部屋での女ばかりの語らいであり楽しみである。そこでは性的な話題は自由に処理される。「夕食後、六人ほどの親戚の陽気な娘や妻たちが、糸巻き竿を持って離れに集まるのだ。」（491）ラウは次第に打ち解けてゆき、特になぞなぞを楽しんだ。「私は痩せた女王様で／頭に優美な冠を戴いています。／忠実に仕えてくれる人には沢山の褒美をあげましょう。／腰元たちよ私の髪をきれいに結って／メルヒェンをいっぱい聞かせておくれ。／腰元たちは私の毛を一本も残してはおきません／それでもご覧なさい、禿げてはいません。／散歩には遠慮なしにでかけます／早足で、とても上品に。／それでもその場からは離れません。／ ― さあ皆さん言ってごらん、これは一体何でしょうか。」（492）これがラウのもっとも気に入ったなぞなぞであるが、多分その答えは糸紡ぎの紡錘であろう。この一見無邪気そうな答とされる紡錘はしかし、棒状で男性性器を連想させるのである。糸紡ぎ部屋でラウはこのような猥談を楽しみ、性に対しておおらかな眼差しを持つようになる。糸紡ぎ部屋が性的に猥雑な世界で

あり、若い女性たちのセクシュアリティーの発散の場であったことは知られており、[注9] またメーリケは性に関する表現をかなり大胆（露骨）に行うことがある。[注10]

ラウは糸紡ぎ部屋で、舌のもつれそうな早口言葉も楽しんだ。「スライタクレッツレブライグライバイブラウボイレン」(498) ― ラウはこの早口言葉を唱えて舌をかみそうになり、大笑いをする。五度目の笑いである。そしてこの時、突然の知らせが入る。知らせをもたらすのはベータの長男である。「お願いだから。ラウを家へ帰しなさい。[…]青の壺が溢れて、下の通りはもう水に浸かっている[…]大洪水でも来るみたいだ。」（498）糸紡ぎ部屋にもたらされたこの緊急の知らせに、青の壺の主人であるはずのラウが青ざめる。「それは王様だわ。夫だわ。それなのに私は家を明けているのよ」(498) と彼女は弱気な答をして失神してしまう。[注11] 糸紡ぎ部屋で女たちとのびのびと過ごしていたラウは、夫の来訪に怯えざるをえない。彼女には夫に対する信頼感がないのである。ラウにとって夫は怖れの対象である。家を留守にして外で楽しみを持つ妻を、夫はきっと赦さないであろうとラウは考えている。この危機を救うのは次男坊のクサーヴァーである。彼はまだ独身であるため、父権を行使するまでには達していない。既婚の長男はたぶんラウの（家を留守にした）怠慢を責めていたのであろう。しかしクサーヴァーはもっと柔軟でありモラルに凝り固まってはいない。

クサーヴァーは、ラウを池のそばまで抱きかかえてゆき、カボチャの畑に寝かせて、失神しているラウにいたずらのキスをする。それは一つのレイプであるには違いないが、メーリケは面白おかしく書く。「彼女にキスをしたら、一生の喜びになるぞ。水の精と一度キスしたんだと、言えるじゃないか」（499）と考えて大胆な行動に及んだ若い男のいたずらに、ラウの腰元たちは怒り、クサーヴァーにびんたを食らわし、その音は修道院に反響し、驚いたクサーヴァーはほうほうの体で逃げる。失神していながらも、キスをされたラウは心から笑う。それは、ちょうどラウが初めて笑った夜、夢の中でニクセになった女将に修道院長がキスをしてその音が修道院全体に反響したように、今回はしかし夢ではなく本物のびんたの音が修道院の壁という壁に反響する。かつて夢のなかでキスをされたのはラウの代理人としての女将であったが、今回はラウ自身であり、しかも若い独身の男性によるキスである。これは六度目の笑いを呼んだ。本来ならばさきほどの早口言葉の笑いで、必要な笑いは実現したことになり、その時に願いが成就したといえるであろう。そのあとで直ちに夫の来訪が告げられたからである。しかしこの六度目の笑いは、ラウのセクシュアリティーにまさに直接的に関わるものであるがゆえに、ラウの成熟にはやはり必要であったといえるであろう。もちろんこの最後の笑いは、夫のある身で受けたキスにより引き起こされたものであるから、反モラル的な笑いであると言えるのかもしれない。最初の夢ではラウは女将に代理させて夫以外の男性とのキスを経験していた。しかし今回は実際に自分が受けるのである。もちろんラウは失神していたので、彼女の意志とは無関係に行われたものとなり、ラウの道徳性には問題はないとすべきであろう。しかしラウは失神しながらもキスを受けて笑う＝喜ぶのである。メーリケは相当に大胆な事柄を表現しているのかもしれない。年老いた夫からは得られない快楽を、ラウは若い独身男性から与えられ、それにより彼女のセクシュアリティーは初めて成熟したものになった、と考えてよいのであろうか。いずれにせよこの経験を経て、ラウはあらためて結婚生活に戻ることができるのである。

さて、ラウが夫のもとに帰り、健全な結婚生活を送って、子どもをもうけられるようになるためには、最後のクサーヴァーによる接吻も役だってはいるが、何よりも必要であったのは、ベータ女将や娘たちの人間の女とのつき合い、糸紡ぎ部屋における娘らしいイニシエーションであろう。ラウは女たちの空間で癒され、女らしさと妥協し、女として楽しむことを覚えたのである。子どものできぬ女を追放し、また歴史的には経済的効率を優先して自然を虐げてきた父権的な社会の抑圧から、ラウを抱き取り、癒し、生きる力を付与したのは、女性たちであったのだ。(注12) 青の壺に棲んで供物を捧げられても恵みの女神にはなれず、母親のようなベータに、多産のシンボルであるカボチャを植えてもらって、ようやく癒され始めたラウは、まさに人間の女たちの援助を得て、本来の性質をとり戻したのである。それゆえこのメルヒェンには、女性による人間と世界の救済という大きな希望がほの見えているのかも知れない。まさに男性だけで営まれるキリスト教修道院は、恵みの女神のラウを蔑ろにし、彼女の権威を奪う。そして、母権的な自然を枯渇させて、ついには父権的な制度で世界を統べようとする。しかし母親のようなベータはカボチャを植え、母性的な自然との交流を保とうとしている。女性が笑いを忘れて子どもを持たなくなるような社会を、癒して回復させ、本来のバランスのとれた世界に戻すことができるのは、女性を措いてほかにないと、メーリケは言おうとしているように思われる。

結

ニクスの王が到来したあとでは、しかし女性の力は限りなく小さくなる。ベータたち女性集団の存在はほんの片隅に追いやられている。女たちは男性社会に気を遣い続ける。世話になった女たちに礼を述べ別れを告げるためにも、ラウは男たちのもとをこっそりと抜け出して来なければならない。「王様は私には優しくて慈悲深く、私は今日はじめて花嫁になったかのようです。[…]私はこっそりと寝室に逃れ、ここへ来ました。お友達にご挨拶し、心から抱きしめるために。」（501）ラウは夫の来訪を告げられたとき驚き恐れ失神した。しかし彼女は夫は怒らなかったと言って喜び、王は寛大な人だと讃える。心から楽しめず、健康な子どもも生めず、まさに病気といってもよい同情されるべき状態にあった時に、無慈悲な夫により、ラウは故郷を追放された。しかし、やっと笑いを覚え、流刑を解かれたかと思えば、今度は夫の顔色をうかがわなければならない。それは女たちとの自由な楽しみを失ったとも言えるのではないだろうか。だがラウは夫は慈悲深いと誉めて、卑屈な喜び方をする。王である夫は、ラウがまもなく五度目の笑いを達成すると母親（ラウの姑）に予言され、さっそく「諸侯たち、つまり彼の叔父と私（ラウ）の兄のズュント、それにたくさんの殿方を伴って」（501）、はるばるラウを連れ戻しにやってきたのだ。権力の頂点にある男たちの集団が黒海の方から押し寄せてくる。女たちはただ畏まり感謝するしかない。ラウはいまや、完全に夫が誇示する父権のシステムの中に、取り込まれたのである。

女たちによる癒し、女たちによる世界の回復、父権的システムの改善のように見えたものは、一瞬にして消え去る。そして、ラウが女性として成熟し成長を遂げていったかに思われたプロセスは、実は、男性社会の片隅に取り込まれ、父権制を支えるために子どもを生むための、準

備段階に過ぎなかったのである。いかがわしい世界であったはずの糸紡ぎ部屋の営みを、明るく健全なものとして描くなどして、女性の持つ救済能力を高く評価するかに見えた作者ではあるが、結局は、近代の男性による女性支配と父権制度の堅持を肯定してしまっているのである。

テクスト

Eduard Mörike: *Sämtliche Werke in 2 Bänden.* [Hrsg.] v. Jost Perfahl und Helga Unger. München 1967 und 1970. Bd.1.
引用のあとの（　）内の数字はこのテクストのページ数を表す。

注

（1）岩元修『ビーダーマイアー期のメルヒェン ― メーリケの〈シュトゥットガルトの皺くちゃ親爺〉について ―』[大阪府立大学紀要（人文・社会科学）第49巻（2001)掲載] 11ページを参照。

（2）同上論文、17-18ページを参照。

（3）Vgl. Henriette Beese: *Nachwort.* In: *Von Nixen und Brunnenfrauen. Märchen des 19. Jahrhunderts.* Frankfurt a.M. und Berlin und Wien 1982.

（4）フケーのウンディーネは尾も鰭も持たず、姿は人間と全く同じである。
Vgl. Friedrich de la Motte-Fouqué: *Undine.* In: Hrsg. v. Maria Dessauer: *Märchen der Romantik.* Bd.1. S.215-298.
十五世紀の民衆本に登場するメルジーネは下半身が蛇である。この物語については藤代幸一訳『クラーベルト滑稽譚、麗しのメルジーナ』（国書刊行会1987年）に含まれた『麗しのメルジーナ』を参照。

（5）Vgl. Theodor Storm: *Die Regentrude.* In: Ders: *Sämtliche Werke in 4 Bänden.* Frankfurt a. M. 1988. Bd.4. S.79-108.
Vgl. Irmgard Roebling: *Prinzip Heimat — eine regressive Utopie? Zur Interpretation von Theodor Storms „Regentrude“.* In: *Schriften der Theodor-Storm-Gesellschaft* 34(1985). S.55-66.

（6）『麗しのメルジーナ』がその例である。

（7）『ウンディーネ』がその例である。

（8）しかも水の精は、その自然との結びつきの強さ（elementar）と美しさにより、人間の男を誘惑する存在として恐れられ、かつ見下げられた。
Vgl. Inge Stephan: *Weiblichkeit, Wasser und Tod.* In: Hrsg. v. R. Berger und I. Stephan: *Weiblichkeit und Tod in der Literatur.* Köln und Wien 1987. S.117-139.
Vgl. Beese: a.a.O.

（9）中世からあった「夜の集い」。十九世紀になっても農村には残っていた。

浜本隆志『ねむり姫の謎 — 糸つむぎ部屋の性愛史』（講談社1999年）を参照。

(10) たとえば『ある少女の最初の愛の歌』においては、男根のことが歌われている。
Vgl. Eduard Mörike: a.a.O., S. 685.

(11) ラウが失神する意味については以下の論文に詳しい。
Vgl. Dörte Fuchs und Andrea Günter: *Lachend in die OhnMacht. Eduard Mörikes „Historie von der schönen Lau". Archäologie eines Textes*. In: *Seminar* 14 (1978). S.243-254.

(12) ラウが人間の血を引いていることから、「人間」との接触に重点を置くのは、以下の論文である。
Vgl. Anke Bennholdt-Thomsen und Alfredo Guzzoni: *Das Bild der Wasserfrau in Mörikes „Historie von der schönen Lau"* In: *Archiv für das Studium der neueren Sprachen und Literaturen* 224 (1987). S.254-269.
ラウが「女性」とのつき合いで癒しを経験するという点に関しては、以下の論文を参照。
Vgl. Fuchs und Günter: a.a.O.
Vgl.Roebling: a.a.O.